

フエ大学外国語大学日本語日本文化学部の学生における相槌使用 の課題と指導への示唆

DUONG Thao Vy*, TRINH Tran Ngoc Khanh

フエ大学外国語大学

要旨

本研究は、ベトナム人日本語専攻学生の会話における相槌の使用実態と課題を明らかにし、日本語教育への示唆を得ることを目的とする。対象はフエ大学外国語大学の3・4年生130名であり、質問紙調査を実施し、定量・定性的に分析した。調査の結果、多くの学生は相槌の基本的な機能を理解しているものの、使用が単調であったり沈黙を選択したりするなど、効果的に活用できていない実態が明らかになった。主な要因として、相槌の役割に対する認識不足、指導の不十分さ、母語文化に由来する心理的要因、ならびに実践的な会話経験の不足が挙げられる。以上の知見から、日本語教育において相槌を体系的に取り入れ、実践的なロールプレイや母語話者との交流、AIを活用した模擬会話や個別フィードバックを通じて、学習者が自然な相槌を習得できる機会を設ける必要性が示唆される。

キーワード: 相槌、異文化コミュニケーション、日本語教育、談話分析、学習者意識

Abstract

This study examines the use of aizuchi in conversations among Vietnamese students majoring in Japanese and explores related difficulties and pedagogical implications. A questionnaire survey was conducted with 130 third- and fourth-year students at the University of Foreign Languages and International Studies, Hue University, and the data were analyzed using both quantitative and qualitative methods. The findings show that although most students recognize the basic functions of aizuchi, their actual use remains limited, often monotonous or replaced by silence, which reduces communicative effectiveness. The main factors include insufficient awareness of the pragmatic role of aizuchi, inadequate instructional emphasis, cultural influences from the learners' mother tongue, and limited opportunities for authentic conversational practice. These results highlight the need to systematically incorporate aizuchi instruction into Japanese language education. Pedagogical approaches such as role-play, interaction with native speakers, and AI-assisted simulated dialogues with personalized feedback are recommended to promote the acquisition of natural and context-appropriate aizuchi.

Keywords: *Aizuchi, intercultural communication, Japanese language education, discourse analysis, learner awareness*

1. はじめに

日本語の会話において、相槌は相互作用を維持し、聞き手の関心・同意・反応を示すうえで極めて重要な役割を果たす。近年、人工知能が外国語教育に広く導入されつつある状況においても、相槌は社会的コミュニケーションの繊細な側面を示す代表的な事例であり、技術だけでは完全に再現することが難しい。これはまた、学習者に対して文化的・社会的文脈を踏まえたコミュニケーション能力を方向づけ、育成していくうえで、教師が依然として不可欠な存在であることを裏づけるものである。

相槌の使用は単なる言語表現にとどまらず、日本人のコミュニケーション文化に対する理解をも反映する。そのため、日本語を実際に運用するうえで欠かせない技能として位置づけられており、とりわけ外国語として日本語を学ぶ者にとって重要である。

しかし、ベトナム人日本語学習者の多くは、文法や語彙の基礎が十分であっても、相槌を適切かつ柔軟に使うことに困難を感じている。聞き手として応答する場面で戸惑ったり、相槌を単調に、不自然に用いたりする傾向がある。また、まったく反応せず沈黙してしまう場合もあり、会話の流れが途切れたり、相互作用が失われたりすることも少なくない。この現状は、相槌が重要な語用的コミュニケーション技能でありながら、ベトナムにおける日本語教育では十分に重視されていないことを示している。

本研究では、以下の研究問題に答えることを目的とする。

1. 学習者は日本語の会話において相槌をどのように認識し、実際にどのように使用しているのか。
2. 相槌使用における一般的な問題点は何か。
3. 相槌が効果的に使われない要因は何か。
4. 学習環境や現行カリキュラムの要素は、相槌の運用にどのような影響を与えているのか。

本研究の成果は、日本語教育における内容および教授法の改善に資するものであり、人工知能が支援する現代教育の文脈に適合した、高度な社会的相互作用を伴う会話能力の育成に向けた提案を行う基盤となる。

2. 理論的背景と関連研究

2.1. 相槌（あいづち）の概念

日本語語用論において、相槌（あいづち）とは、聞き手が話し手に対して注意を払っていることや同意、あるいは発話の継続を促すことを示す、短い言語的・非言語的反応と理解されている。水谷修・水谷信子（1987）は、相槌を「聞き手が会話を聞き取り、理解していることを示す合図や短い言葉」と定義しており、「はい」「うん」「そうですか」といった表現のほか、うなずきや表情の変化なども含まれる。同様に、Maynard（1997）は相槌を話し手に対して聞き手の追従を伝え、会話を持続させる「フィードバック・シグナル」として捉え、Clancy et al.（1996）は「reactive tokens」と呼び、発話交替を調整し、対人関係を示す役割を強調している。

諸研究に共通しているのは、相槌が多様な機能を担っているという点である。具体的には、(1) 受容的反応——聞き手の注意や理解を確認する役割、(2) 会話維持——相互作用を円滑に進め、中断を避ける役割、(3) 社会関係構築——同意や礼儀を表し、対人関係の調和を保つ役割である（山田, 1992 ; Maynard, 1997）。さらに、相槌は出現頻度が高く、比較的一定の規則性に従っており、発話の自然な切れ目で用いられる傾向があることも指摘されている（林, 1990 ; Clancy et al., 1996）。この点について、Kita & Ide（2007）は、日本語会話における意味の共同構築を補強する要素として位置づけている。

以上を踏まえ、本研究では相槌を、日本語の会話において聞き手が用いる短い言語的・非言語的表現であり、情報の受け取りや反応、または相互作用的態度を示すものと定義する。相槌は会話の継続性と礼儀的側面の両方において重要な役割を担っており、具体的には以下のように整理できる。

- 会話を円滑かつ連続的に進行させる役割
- 礼儀・同意・対人関係を示す手段としての役割

2.2. ベトナムにおける相槌（あいづち）の教授・学習状況

ベトナムの日本語教育においては、近年コミュニケーション能力の育成が重視されるようになってきたものの、相槌に関しては体系的に指導されていないのが現状である。代表的な教科書である『みんなの日本語』や『会話に挑戦』などでも、相槌は短い例示にとどまり、状況に応じた使用方法についての具体的な指導はほとんど見られない。

本研究における授業観察の結果によると、多くの学習者は文法や語彙の知識が十分であっても、会話の中で相槌を用いなかったり、文脈・頻度・表現の種類において不適切な使用をしたりする傾向がある。また、一部の学習者は「はい」や「そうですか」といった限られた表現を繰り返し使うだけで、柔軟性や自然さに欠ける。このような実態は、学習過程において語用能力の育成が十分に意識されていないことを示している。

2.3. 先行研究の概観

国際的な研究では、相槌のコミュニケーションにおける役割や、学習者がこの要素に直面する困難が明らかにされてきた。Clancy et al. (1996) は、日本人とアメリカ人の相槌行動を比較し、頻度や形式に大きな違いがあることを指摘している。アメリカ人は日本人に比べて相槌を用いる回数が少なく、その結果、異文化間コミュニケーションにおいて語用的摩擦が生じる可能性があるとして報告している。Maynard (1997) は、相槌が共感の構築や会話構造の維持に果たす役割を分析しており、Yamada (1992) は相槌を使い慣れていない学習者が、母語話者から非協力的あるいは無礼と誤解されやすいことを警告している。

ベトナムにおいても、Ngan, D. H. (2017) や TMP Tran (2025) などの修士論文や専門誌論文などで語用的要素の指導が取り上げられ、その一部として相槌が論じられてきた。しかし、これらの研究は主に理論的な枠組みや教科書分析にとどまり、日本語学習者による相槌の使用実態を体系的に調査したものはほとんど存在しない。そのため、ベトナム人学習者の相槌使用に関する実態・認識・習得度を明らかにする研究は、日本語による効果的なコミュニケーションを考察するうえで依然として重要な研究課題として残されている。

3. 研究方法

以上の研究課題を明らかにするために、本研究はフエ大学外国語大学日本語日本文化学部の3年生および4年生130名を対象として実施した。データは質問紙調査を通じて収集し、質問紙は選択式質問と自由記述質問を組み合わせた構成とし、日本語会話における相槌に関する認識、使用方法および使用態度、ならびに相槌に関する学習経験などを測定した。得られた調査結果は記述統計により分析した。

4. 調査結果

本研究では K19 (2022年–2026年) および K20 (2023年–2027年) の130名の学生を対象としたアンケートの結果を分析する。その中で、学生の日本語能力は主に N3 (中級レベル) が69%を占め、N4 (初中級レベル) が22%を占めている。また、約60%の学生が中級レベルの会話を学び、実践した経験がある一方、残り39%は初級レベルに相当する。

最初に、研究チームは学生の相槌に対する認識について調査を行い、以下の結果を得た。

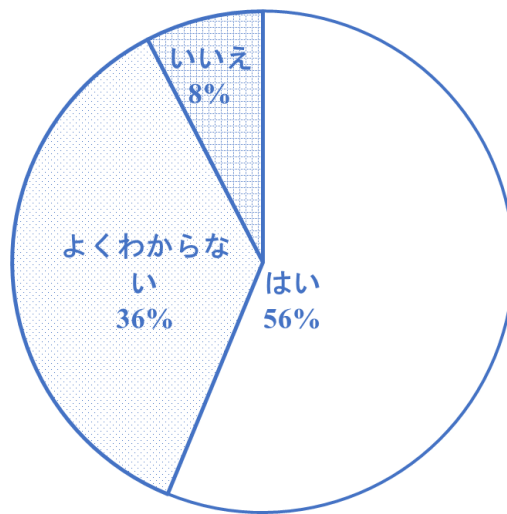


図1 「あいづち」(相槌)について知っている、または学んだことがありますか

収集したデータによれば、学生の大半(56%)が相槌について学び、基本的な概念を形成していることが容易に分かった(59%)。ほとんどの学生は相槌がそれほど難しくないと考えている(51%)。図2にも示されるように、学生の大多数が「相手の話を聞いていることを示す」や「相手が安心して会話できるようにする」といった相槌の主要な機能を理解していることが判明する。

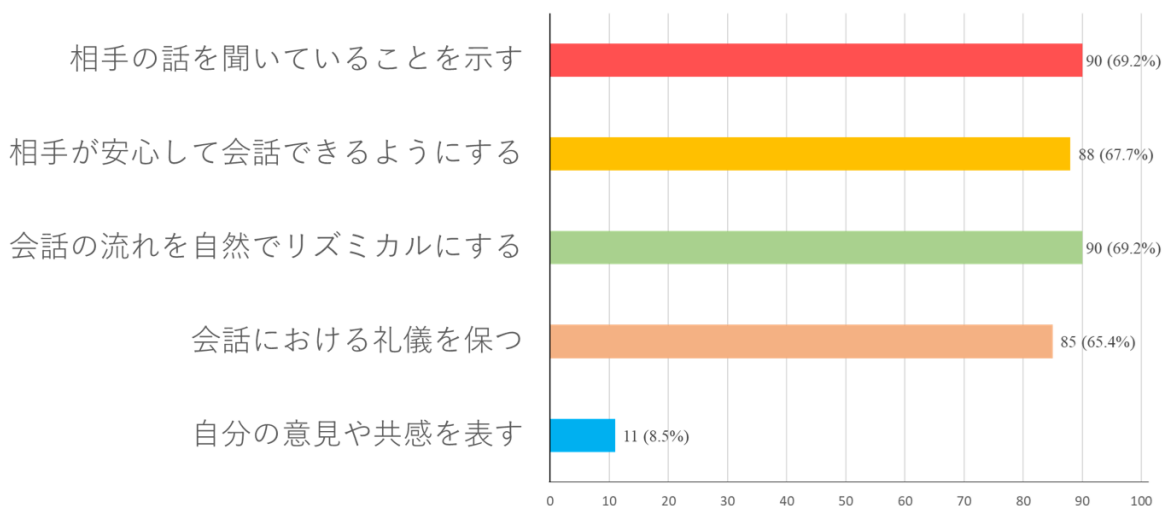


図2 自分の考えでは、相槌の主な機能は何だと思えますか

しかし実際には、相槌の普及はまだ全体的に効果的ではなく、36%の学生が相槌について学んだかどうかを知らず、30%は相槌が何であるかを理解しておらず、わずか10%の学生は相槌の概念を全く知らないという状況である。学部の学生は1年目から基本的な話すスキルを学ぶが、専門的なトレーニングは2年目から始まることになる。最初の数週間の授業では、教員が相槌の要素に言及するが、説明がまだあいまいで、具体的なフィードバックが不足するため、これが上記のような現状に繋がる主な原因である。

次は、学生の相槌の使用実態について

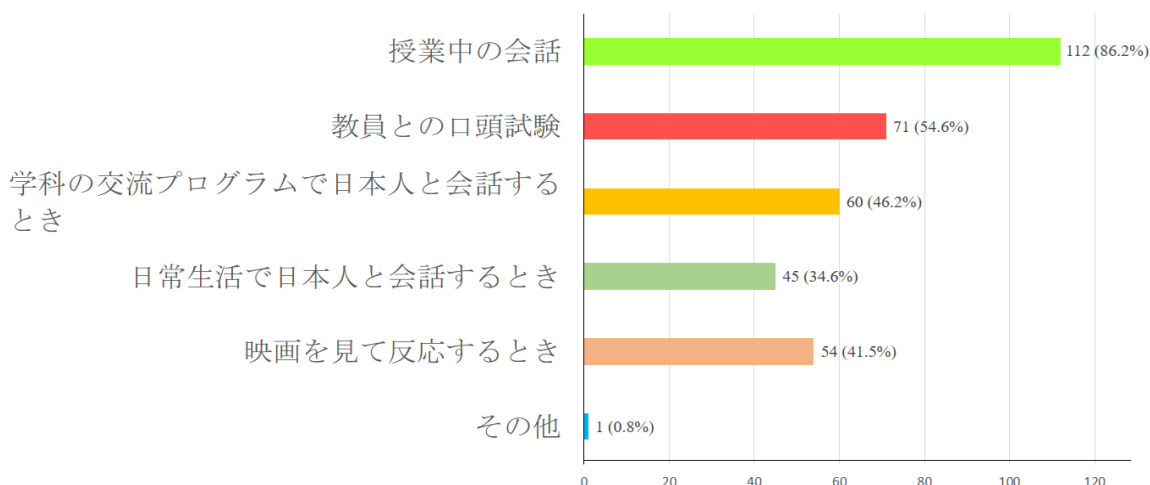


図3 どのような場面で相槌をよく使いますか

大多数の学生は、授業中の会話（86%）、口頭試験（54%）、および日本人と接する交流会（46%）で相槌を使用している。さらに、映画を見て反応することで自宅でも練習したり（42%）、学校外で日本人との会話練習の機会を積極的に探すことも行っている（37%）。これにより、学生は日本語を使用する際に相槌を活用していることが明らかになった。確かに主に学校範囲内でやっているが、ある程度学習者が基本的なコミュニケーション習慣を身に着け、ネイティブスピーカーとの接触にも自信を持つようになった。調査によると、70%の学生が言語的な相槌（はい・うん・そうですか・へえなど）と非言語的な相槌（うなづく・眉をひそめる・首をかしげるなど）を使用できるという。相槌の使用頻度も高く、45%の学生が「はい」や「うん」といった反応の言葉を常に使用するに対し、49%は時々相槌を使用するという結果が出た。だが使用頻度はかなり高いものの、相槌を使用する際に学生が直面する問題に関する調査では、85%の学生が「はい」や「うん」など同じ言葉や動作を繰り返すすぎると答え、47%が意図もなく、無意識に使用してしまうこと、41%が状況に応じてどの相槌を使えばよいか分からないこと、42%が反応が遅いこと、15%が不自然で、ぎこちなく感じる事が挙げられた。学生が指摘した主な原因は、以下の図4に示される。

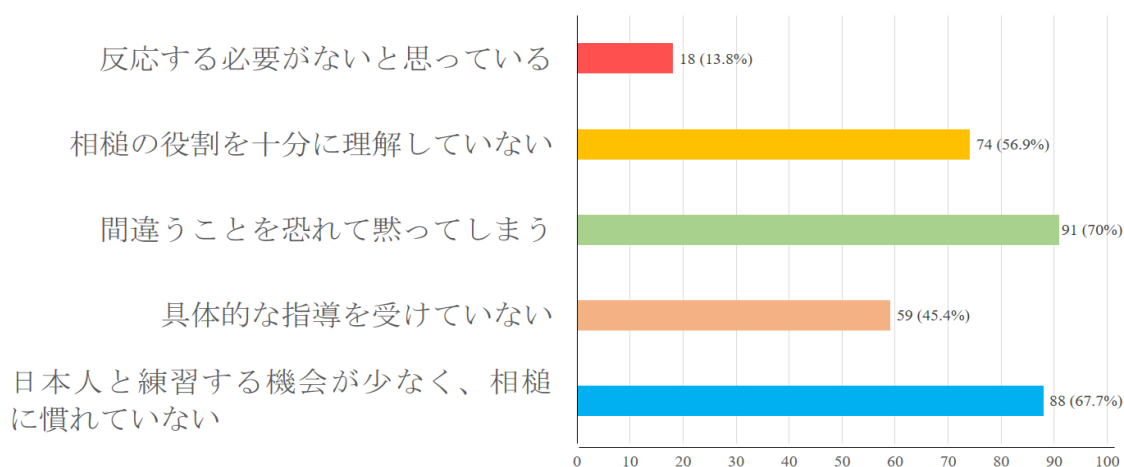


図4 なぜ多くの学科の学生が相槌の使用に問題を抱えているのでしょうか

従って、70%の学生が間違いを恐れるために沈黙を選ぶことが分かった。これはベトナム人、特に中部地方の人々が外国語を学ぶ際にありふれた心理である。「他人から評価されるのが怖い」、「失敗が恥ずかしい」のような心理は、学んだスキルを活用することを躊躇させる大きな障壁となっている。さらに、ベトナムと日本のコミュニケーション文化には多くの違いが存在することにより、相槌を自然に活用する能力に影響を与えている。日本人との練習や接触の機会が足りないことも、多くの学生が直面している問題である（68%）。それに加えて、前述のように、相槌の指導がまだ不足しているため、学生が相槌のコミュニケーションにおける役割を十分に理解していない状況が続いている（60%）。相槌が必要ないと考えてしまう学生もいる（14%）。

どの相槌を使用すべきか分からない場合では、多くの学生は通常、笑ってごまかす（72%）、沈黙を保つ（42%）、または短い反応の代わりに長い返答をする（38%）。ごく少数は、どのように反応すべきか分からずに行き詰まる（13%）。これらのデータからは、学生がコミュニケーションにおいて柔軟性を持ち、完全に受動的ではなく、コミュニケーションを維持するために臨機応変に対応する方法を知っていることが推測される。同時に、笑顔や静かに聞くといったジェスチャーも、ベトナムには珍しくない相槌である。

続いて、自分の相槌の使用能力を自己評価したところ、59%の学生が自分のレベルを「普通」と評価した。また、26%はあまり良くないと感じている。ただ 13%の学生はかなり良いと評価した。

この結果は、一定の理解があり、授業で練習した経験があるにもかかわらず、学習者のスキルがまだ高くないことを示しており、そのため学生は日本人とのコミュニケーションをすれば、相槌の使用に関する問題に直面しやすくなる。困難を克服し相槌の使用能力を向上させるために何をしたら尋ねたところ、大多数はネット上の動画、アニメ、映画などからのキャラクターの真似をする一方、一部は方法が分からず、どこから始めればよいかも迷っている。要するに、学習者には相槌の使用スキルを向上させたいという意識を持っているものの、体系的な方法がわからず、主に個人的な経験に頼っており、模倣のレベルにとどまるが、深く理解するには至っていないという共通点がある。

相槌の教育の質を更に明確にするために、研究チームは調査を実施し、以下のような結果を得た。

84%の学生が、相槌の定義、役割などがカリキュラムに含まれ、授業内容にも導入や練習があることに同意している。クラスでの会話練習において、相槌の使用練習は基本的なレベルにとどまっており（75%）、17%は非常に効果的であると考えている。逆に約 8%の意見では練習が効果をもたらさない、または具体的な活動が全くないと評価した。相槌の練習が行われたクラスの場合でも、教員からのフィードバックはあまり的確ではないコメントのみ（58%）、フィードバック活動がない（11%）と認識している。学生に対する詳細な評価や誤りの修正は依然として低い水準にあり、わずか 35%である。

つまるところ、各クラスの間には練習の格差がまだ存在している。また、教員自身も相槌に対する考え方が異なる。重視し、丁寧に指導する教員がいれば、相槌は語彙や発音などの他の要素ほど重要ではないという人もいる。

最後に、学習者の希望や提案については、98%の学生が相槌についてより深く学びたいという共通の願いを持っており、77%が教員からのより詳細な指導を望んでいる。それに加えて、

自己学習の方法としては、動画を見て模倣すること（85%）、会話の様々なシチュエーションを模擬して反応を練習すること（74%）、資料で研究すること（50%）、AI アプリを活用すること（25%）が挙げられている。

いくつかの学生は、アンケート調査を通して学部に対して以下のように提案した。

S1

「可能であれば、日本人または経験が豊富なベトナム人の教師による、相槌に関するより深い授業を受けたいです。日常生活や職場でのコミュニケーションに関する実際の経験を直接聞くのは、最も効果的な方法だと思います。学生のみみんなが自信を持って、円滑にコミュニケーションを取るために、先生方からは、効果的なコミュニケーションのコツ、文化的なマナーについて言及し、「すべきこと」と「すべきではないこと」についても共有していただけると幸いです」

S2

「相槌については、より具体的に指導されるべきだと考えます。特別なクラスとして開講するのはどうでしょうか。そうすれば、学生たちはこのようなクラスで習った知識を今後の学習にも応用できるようになると確信します。」

S3

「意見交換という形とか、体験イベントなどの相槌の使用を中心した活動が欲しいです。相槌を実践するために、学生は、ロールプレイ、グループディスカッション、さらにはゲームなどの活動に参加できれば、とても素晴らしいです。」

S4

「日本語を学ぶためのアプリを上手く利用すれば、相槌や、他のコミュニケーション力が必ず高まると思います。それに練習問題、クイズ、または指導動画も、相槌をより深く理解するのに役立ちます。」

S5

「専門的な知識だけでなく、日常会話のための自然なコミュニケーションの使用方法に関するビデオや学習資料を提供して欲しいです。」

S6

「私は、会話の授業では、実際の会話を通じて相槌を練習するための時間がもっと増えるように望んでいます。これによって、学生は聞くことと話すことの両方の反応スキルを身につけられます。また、学部が日本人とのコミュニケーションの場を設けたり、日本人のゲストを招いて交流会を開催することも期待します。そうすると、皆がより自然な会話ができるようになるでしょう。」

他にもまだ多くの意見があるが、一般的に多くの学生は、相槌についてより深く学び、練習を強化し、教員からの詳細なフィードバックを求めている。伝統的な学習方法はもとより、テクノロジーの応用を組み合わせ、効果を高めることも重要である。その一方で、実際のコミュニケーションに適応する法を学ぶために、現地の人々との交流や、文化に触れる活動が欠かせないものである。

情報を参照することがますます容易になっている現代社会において、学習者は、インターネットを通して多様で、非常に豊富な資料にアクセスできるようになっているが、情報が氾濫し、正確性が保証されないという問題があるため、混乱しやすく、方向性を見失ってしまうだろう。

多くの学生は、どの情報が正しいか、どの情報が誤っているかと迷い、あるいはAIを盲目的に信じてしまい、自らの思考力を失いつつある。したがって、教員の役割と使命は、単に知識を伝えるのみならず、方向性を示し、基本的なスキルの基盤を築き、学習者と共に練習し、研究を行い、彼らの総合的な成長を支えることである。

まとめ・提案

上記の研究結果から、ほとんどの学生が相槌について基本的な認識を持っており、コミュニケーションの場面で多少活用はできるものの、依然としてまだ多くの問題があり、理解度は浅く、使用においてはかなり機械的であることがわかった。それにもかかわらず、学習者は探求心を持ち、学習意欲があり、授業の質を更に向上させることや、スキルを発展・向上させるための多くの課外活動を求めているということもわかった。

また、この調査を通じて、学部が直面している教育上の問題、例えば内容の一貫性の欠如、フィードバックや評価の不十分さ、学習者への指導方法の明確さがまだ不足していることも明らかになった。これらの課題を把握した上で、著者グループは以下のような提案をしたい。

提案①：教育の質の向上：言語実践科目全般、特にスピーキングスキルのカリキュラムを見直し、各クラスの内容を整合させ、1年生から4年生までの一貫した連携を構築する。相槌の活用方法の指導と相まって、学習者のスピーキングスキルを向上させる。学習者に初年度から基本的な概念を形成し、相槌の重要性を理解できるようにさせる。連続的な実践演習を実施し、フィードバックと組み合わせることにより、学習者が授業ごとに上達できるように支援する。

提案②：実践的なコミュニケーションの強化：多数の学生は基本的なレベルで相槌を使用できるものの、心理的な障壁、例えば自信の欠如や間違いを恐れることによる懸念がまだ存在している。このような問題を克服するために、学生は実践的なコミュニケーション経験を重ねる必要がある。研究グループは、課外授業、セミナー、特に日本人との交流を体系化することを提案し、学生により良い体験と実践の機会を与えるべきである。

提案③：教員の専門能力の向上：研究グループが結論付けたように、教員の役割は単に知識を提供するのみならず、学習者を正しい道に導くことでもある。そのためには、各教員の専門的なスキルが非常に重要な要素となり、知識と実践的なスキルの両方を十分に備える必要がある。定期的に、研修コースを開催し、セミナーに参加し、言語教育の分野における最新の知識の更新に努める。

提案④：効果的な学習資料を紹介し、テキストを作成すること：日本語・日本文化学部は諸教育機関と連携し、資料や研究のリストを作成したりすることにより、学習者が信頼できる情報源にアクセスできるようにする。

提案⑤：各国には独特の文化的なコミュニケーションスタイルがある。日本人はしばしば相槌を使ったり、頷いたりするのに対して、ベトナム人はその代わりに笑ったり、静かに聞いたりする傾向が多い。重要なのは、学習者がそれぞれの文化を尊重し、「郷に入っては郷に従え」を学び、様々な状況を分析し、対応できることである。一方、日本側でも、日本人がベトナム人のコミュニケーション特性を理解することで、文化的な摩擦を大幅に軽減し、対話の調和できるようになる。国際的なワークショップは、日本からの専門家や教師がベトナムの文化や

人々をより深く理解するための良い機会であり、それによって日本国内でのベトナム語教育やベトナム学の促進につながるだろう。

研究グループは、上記の提案を実施することで、日本語・日本文化学部の学生の相槌の使用スキルが改善され、日本人とのコミュニケーションにおいてより自信を持ち、日本語を使用する環境での能力を最大限に発揮できるようになると信じている。

結論

以上、本稿では、AI時代における外国語教育の課題として、社会的相互作用能力の育成に注目し、相槌の認識と使用実態を明らかにした。

外国語教育は人工知能（AI）の発展と応用によって大きな影響を受け、多くの教授・評価の側面が自動化されつつある。しかし、感情の表出、相槌を通じたつながりの維持、非言語的なシグナルの繊細な処理といった社会的相互作用に基づく能力は、AIが完全に再現することは困難な分野である。したがって、われわれ教員がこうした社会的相互作用能力の形成・訓練・評価のあり方を検討し、AIを取り入れた教育環境に適應できる教育プログラムを開発するとともに、学習者を方向づけ、導き、動機づける中核的役割を再確認する必要がある。

この観点から、本研究はAIが代替し得ないコミュニケーション能力の一端を示す事例である。調査の結果、多くの学生が相槌を効果的かつ適切に用いることができていると明らかになった。具体的には、反応すべき場面で沈黙してしまう、タイミングを誤った反応をする、限られた形式を単調に繰り返す、文脈に応じた柔軟性を欠くといった傾向が見られた。その主な要因としては、相槌の持つコミュニケーション機能への理解不足、母語話者との実践的交流の欠如、心理的な萎縮、そして教育課程における体系的な指導の不足が挙げられる。

これらの知見を踏まえ、本研究は相槌を会話能力育成の具体的目標の一部として位置づけ、実践・体験型アプローチ、実際のコミュニケーション場面を想定したシミュレーション、個別化されたフィードバック、母語話者との交流機会の拡充、マルチメディア教材の活用を提案する。また、会話をまねて、語用的なフィードバックを行うための専門教材の開発やAIの応用は、学習過程を大きく支援し得るが、教員による指導、誤用の修正、学習意欲の醸成といった役割と並行して実施される必要がある。こうした社会的相互作用能力を同時に育成することにより、学生は正確な日本語運用にとどまらず、ニュアンスや態度、繊細さを表現できるようになり、グローバル化社会において円滑に適應し、個性を発揮するための基盤を築くことができる。もっとも、本研究は一大学の学生を対象とした限定的な調査に基づいており、知見の一般化には限界がある。今後は、異なる教育機関や学習段階に属する学習者を対象とした比較研究、さらにはオンライン環境やAIを活用した学習過程における相槌習得の効果検証など、多角的な検討が求められる。

参考資料

- Anh, N. T. L. (2025). Characteristics of Aizuchi usage in conversations of Vietnamese learners of Japanese at the intermediate level. *Journal of Foreign Language Studies*, 83.
- Clancy, P. M., Thompson, S. A., Suzuki, R., & Tao, H. (1996). The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of Pragmatics*, 26(3), pp. 355–387.

- Hayashi, M. (1990). Floor structure of English and Japanese conversation. *Text - Interdisciplinary Journal for the Study of Discourse*, 10(4), pp 363–422.
- Kita, S., & Ide, S. (2007). Nodding, aizuchi, and final particles in Japanese conversation: How conversation reflects the ideology of communication and social relationships. *Journal of Pragmatics*, 39(7), pp 1242–1254.
- Maynard, S. K. (1997). *Japanese communication: Language and thought in context*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Mizutani, O., & Mizutani, N. (1987). *How to be polite in Japanese*. Tokyo: The Japan Times.
- Ngan, D. H. (2017). Characteristics of Aizuchi usage in Japanese-Vietnamese communication observed from the perspective of politeness theory. *Journal of Foreign Studies*, 33(1), pp 82–95.
- Yamada, H. (1992). *American and Japanese business discourse: A comparison of interactional styles*. Norwood, NJ: Ablex.

<著者>

ズオン タオ ヴィー DUONG Thao Vy

修士 フェ大学外国語大学 日本語日本文化学部講師

連絡先 : dtvy@hufllis.edu.vn

チン チャン ゴック カイン TRINH Tran Ngoc Khanh

修士 フェ大学外国語大学 日本語日本文化学部講師

連絡先 : trinhngockhanh0309@gmail.com